

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉第114号 令和3年(2021)12月1日

資料見聞

新出の長宗我部元親書状(大阪城天守閣蔵) 石畑 匡基

近年、長宗我部氏をめぐる通説の修正を迫る研究が続々と生み出されています。その背景の一つに、軍記物語に依拠したこれまでの研究を、書状といった同時代の史料(いわゆる一次史料)の研究によって覆すといった手法が進められているからです。

今回紹介する長宗我部元親書状(以下、史料1)からも、その一端が窺い知れます。まず、史料1の積文を掲げてみましょう。(は改行)

猶以、爰元御用等候者、不被置御心可被仰聞候、此者すなかねふきやう承候て罷戻候へと申候、乍恐自然者奉頼候、以上



長宗我部元親書状(大阪城天守閣蔵)

此頃御帰国候哉と為御音信用飛脚候、何程被成御休息候哉、今度之御帰国寔御仕合目出度、我等一人之様大慶存候、呉々陣中已来得御意、今度於伏見も別而御入魂、御懇意儀共、難忘存候、中々存程不被申候、当国御舟作之儀も近日可相調躰候、于今御三人御在国ノ義共候、何頃可為御上洛候哉、拙者儀、八九月之間二可罷登存候、於上国毎事可得御意候間不能詳候、乍存留筆申候、御床敷存候、恐惶謹言

六月晦日 長土

元親(花押)

垣泉州様 人々御中

史料1は、平成30年(2018)度大阪城天守閣へ収蔵された新出の元親書状です。元親が垣見一直という大名に宛てたもので、朝鮮からの帰国が叶い、伏見で懇談した礼を述べています。朝鮮に在陣していた元親は、慶長3年(1598)5月に帰国し、11月には伏見にいたので、慶長3年の発給と推定されます。「恐惶謹言」という書正文言から、元親は一直へ大変敬意を払っていることがわかります。

元親と一直との関係については、寛永8年(1631)の元親33回忌に霊

前に供えるために編纂された『元親記』のエピソードが知られています。それは、慶長2年10月中旬ごろ朝鮮に陣中の元親は一直と仲が悪くなり(「間あしく成」)、さらに現地での築城をめぐって激しく口論(「事々敷せきあひ」)したというものです。以来両者の仲は険悪であったと考えられてきました。

右のエピソードに対して、津野倫明氏は、当館が寄託を受けている(慶長2年)4月19日付一直宛元親書状(以下、史料2)で、元親が息子盛親の秀吉への「御目見」を一直に依頼しており、史料1と同様に書正文言が「恐惶謹言」という丁寧な書きぶりであることから両者の関係は良好であったと従来の説に疑義を唱えました(「軍目付垣見一直と長宗我部元親」『長宗我部氏の研究』吉川弘文館、2012年、初出は2010年)。

ただし、『元親記』が記すエピソードは、史料2が出された後のものであるため、懇意であった両者が朝鮮での口論によって不仲になった可能性は完全に捨てきれませんでした。ところが、朝鮮から帰国したのちに出された史料1の出現によって、やはり『元親記』のエピソードは誤りであったと判断できます。このように、一次史料の研究によって、編纂史料に依拠した通説を修正することができます。

開館30周年記念企画展

「長宗我部氏とその時代」

—一次史料がつむぎだす、その実像—

会期…令和4年1月14日(金)～3月21日(月祝) 石畑 匡基

当館は本年度で開館30周年を迎え、本年度はそれを記念した企画展を開催してきました。その最後を飾るのが、長宗我部氏を主人公とした「長宗我部氏とその時代—一次史料がつむぎだす、その実像—」です。

30年の間に元親に関連した企画展を当館では何回か開催してきました。その中心は長宗我部氏の活躍や彼らが生きた戦国という時代の研究成果を紹介するものでした。今回の企画展では少し趣向を変えて、長宗我部氏の活躍を知ることができる古文書と

いった一次史料の伝来や、それを用いた土佐や長宗我部氏の研究史に着目してみたいと思います。

■土佐史界の開拓者 谷秦山

谷秦山(1663～1718)は、江戸中期における土佐の儒学者・神道家です。実名は重遠、通称は丹三郎ですが、秦山の号が最も良く知られています。17歳で上京し、山崎闇斎の門下

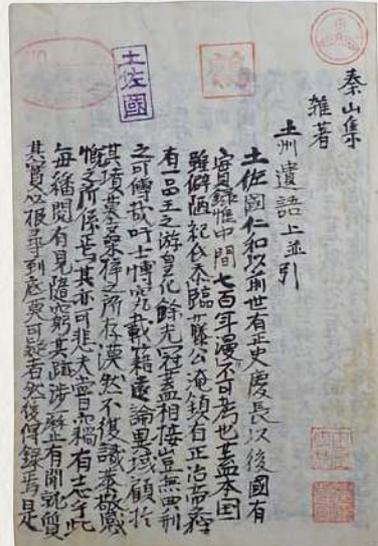


写真1「土佐遺語」(高知県立高知城歴史博物館蔵)

となり、儒学や神道を学びました。元禄元年(1688)、26歳の秦山が編纂を始めたのが、『土佐遺語』です(写真1)。この時期の土佐の歴史書は『元親記』(1631年成立)や『長元記』(1659年ごろ成立)があるのみで、それらに脚色を加えた『土佐物語』や『土佐軍記』の記述が通説として流布していました。そのため、秦山は、郷土史の欠陥と、研究の必要性を訴えました。そして、史実については考証を根拠とし、古文書・棟札・系図などの史料によって通俗や伝説の排除を試みました。この『土佐遺語』の編纂を補助したのが、弟子の奥宮正明でした。

■奥宮正明と『土佐国蠹簡集』

奥宮正明(1648～1726)は、土佐藩の年貢に関わる役職である検見役をつとめた藩士でありながら、秦山に師事した歴史家です。検見役という仕事柄、藩内を巡見する機会が多く、各地の古文書の採訪を行いました。その成果を享保10年(1725)に『土佐国蠹簡集』という編年体の史料集にまとめました(写真2)。収録史料には、当時の所蔵者・所蔵点数が明記され、場合によって正明の註解が記されました。『土佐国蠹簡集』は、昭和52年(1977)に刊行された『高知県史古代中世史料編』にも収録されており、現在も長宗我部氏研究を行ううえに基本文献として欠かすことができないものとなっています。

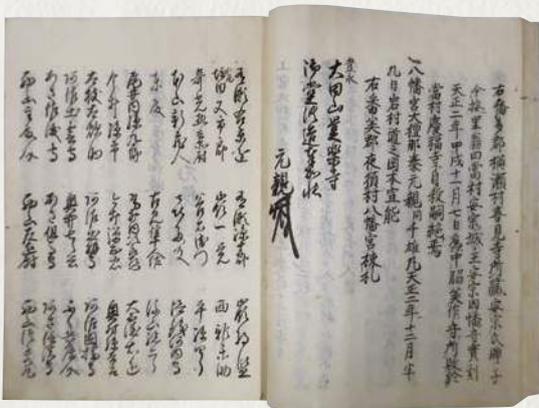


写真2「土佐国蠹簡集」巻4(高知県立高知城歴史博物館蔵)

■編纂史料集の落とし穴

『土佐国蠹簡集』に類似する史料集は日本各地で編纂され、現在では原本が散逸してしまった古文書の記載情報を知ることができるため、大変便利です。しかしながら、手書きによる筆写という性質上、しつかりと史料批判を行ったうえで研究に用いないと思われぬ落とし穴にはまることもあります。

萩藩(長州藩とも)には、18世紀中頃に家臣が持つ家系図や伝来の古文書を筆写して編纂した「譜録」という史料集があります。この中に「長宗我部元親書状」という史料を掲載するものがあります(写真3)。確かに署名は「元親」ですが、その下には「御判」と書かれるだけで、花押までは写されていません。「閏十一月三日」とあるため、

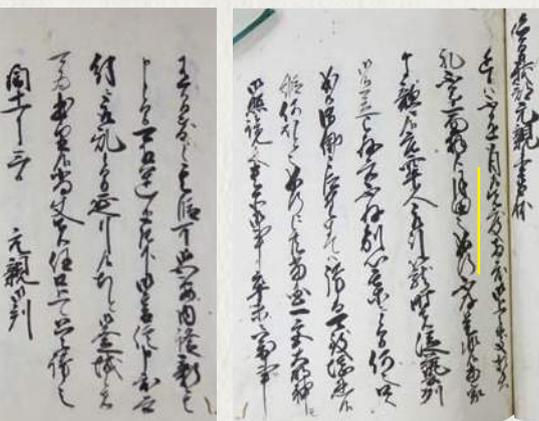


写真3「譜録」(山口県文書館蔵)

天正2年（1574）と比定できますが、これは元親が土佐を統一する前年に当たります。

文中の傍線には「月田之成行」とあります。これは、美作国月田（現岡山県真庭市）で勃発した、戦国大名毛利氏と備中の国衆である三村元親との対立を指すとみられます。そのため、ここで出て来る元親は三村元親と捉えた方が良いでしょう。つまり、写した人が三村元親と長宗我部元親とを取り違えたのではないかと推測できます。

長宗我部元親と三村元親とは花押が全く違うので、原本が残っていたら間違えることはないでしょう（写真4）。ところが、編纂史料に掲載される場合、花押まで写すことはまれです。したがって、記載内容を全て鵜呑みにすることは新たな間違いを生む要因になるので気を付けたいといけません。



写真4「長宗我部元親の花押（左）と三村元親の花押（右）」

■江戸時代も継続された元親の供養

慶長5年（1600）の関ヶ原合戦における論功行賞によって新たな土佐の国主として山内氏が入国します。そのため、長宗我部氏の旧臣は冷遇されたという説もあります。ところが、元親の菩提寺である雪蹊寺では、たびたび元親供養のための法要が催されています。

そもそも雪蹊寺は、古くは真言宗寺院とされ高福寺と称し、のちに慶雲寺に改めたとされています。慶長4年（1595）に元親が死去すると、菩提寺に定められ、元親の法号「雪蹊恕三大禅定門」にちなんで雪蹊寺と改めるとともに、臨済宗に改宗したといえます。山内氏が土佐に入国したのちも、元親の菩提を弔っています。例えば、寛政9年（1797）に行われた「元親公二百年忌」では「御影」の表具を修理しています（写真5）。これは、元親の死の直後に、その息子である盛親が描かせ、雪蹊寺に奉納した

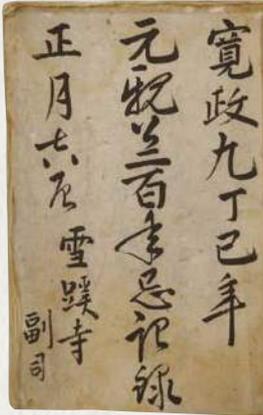


写真5「長宗我部元親法要記」（雪蹊寺蔵）

「絹本着色長宗我部元親像」（写真6）を指すとみられます。法要では参加者からお布施を徴収し、修理費用に充てていたようです。

このように山内氏の時代になっても元親ゆかりの史料は大切に保存されました。

■先人の努力により残った史料

江戸時代も変わらず元親を供養していた雪蹊寺ですが、明治という新時代となり、神仏分離令によりおこった廃仏毀釈という悲劇に見舞われます。これは、仏教寺院を廃寺化し、仏教を排斥するもので、雪蹊寺は明治3年（1870）に一時廃寺に追い込まれます。

そのため、同年閏10月には、元親の弟である親房の子孫と称する長宗我部弥九郎たちが元親父子を祀るために神社の創建を呼びかけました（写真7）。これにより、全国で唯一長宗我部元親を祭神とする秦神社が創建されました。



写真6「絹本着色長宗我部元親像」重要文化財(秦神社蔵)

そして、雪蹊寺に安置されていた木造長宗我部元親坐像や絹本着色長宗我部元親像などの寺宝は秦神社へと移され、社宝として現在まで大切に受け継がれています。

■一次史料の流出を防ぐ

さらに、高知県内に残された貴重な史料が県外に流出するという危機も生じました。そこで立ち上がったのが、郷土史家である寺石正路（1868～1949）でした。

例えば、高知海南学校で教鞭を執っていた際の教え子の一人である八井田寛に対して寺石は旧堀内家文書の購入を勧めています。

旧堀内家文書とは柿木山（現四万十町仁井田）の名家で、その所蔵文書は『土佐国蠹簡集』にも収録されています。寺石が八井田に送った書簡（写真



写真7「奉願」（個人蔵）

8)によると、旧蔵者が自宅を整理した際に売りに出し、現在は江之口(現高知市)の人の所有になっているといえます。ところが、その人もどこかに売りに出したいと言っているようで、貴重な古文書を県外には流出させたくない寺石は八井田に購入を求めたようです。その後、史料は八井田によって購入され、現在ご子孫から当館に寄託されています(写真9)。このような先人達の努力によって貴重な史料が高知県に残され、我々もそれを見ることができるとのことです。

■発見され続ける一次史料

近年、谷秦山や奥宮正明も、その存在を知らなかった一次史料が続々と発

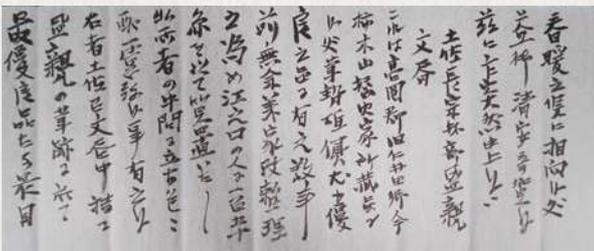


写真8「寺石正路書簡(部分)」(個人蔵)



写真9「長宗我部盛親書状」(個人蔵)

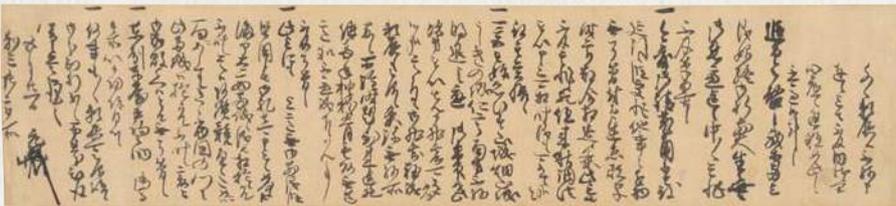


写真10「長宗我部元親書状」(林原美術館蔵)

見されています。

記憶に新しいのが、平成25年(2013)に再発見され、翌年に当館が岡山県立博物館と共同で開催した企画展『長宗我部氏と宇喜多氏』において展示した「石谷家文書」でしょう。特に、元親が明智光秀の家臣である斉藤利三へ宛てた書状(写真10)が話題を呼びました。というのも、この書状が天正10年(1582)に起きた本能寺の変の少し前に発給されたことが判明したからです。

当初、元親と友好関係にあった織田信長ですが、讃岐国(現

香川県)と阿波国(現徳島県)を差し出すように、元親に命じました。しかし元親が、その命令に従わなかったため、天正10年5月7日付で信長は、三男信孝に対して四国の分割案を示すとともに、6月3日に軍勢を四国へ渡海させる準備を進めました。

元親にとって最大のピンチといえる信長による四国攻撃への対応が、斉藤利三宛の書状から読み取ることが出来ます。それは、元親は信長の要求を受け入れ、讃岐・阿波を差し出すことを容認していたというものです。

この書状の内容は、本能寺の変が起こった理由を解き明かすカギになるのではないかと現在も様々な議論を巻き起こしています。

さらに、平成30年度(2018)には高知県立高知城歴史博物館へ元親や盛親が花押を捺した坪付が寄贈されました(写真11、12)。これも従来、知られていなかったものなのです。

坪付とは、主君が家臣に与える知行目録です。写真11は「あさくら(朝倉)」に在住する金地拾(十)兵



写真11「坪付」(高知県立高知城歴史博物館蔵)



写真12「坪付」(高知県立高知城歴史博物館蔵)

衛に対して文禄3年(1594)10月23日付けで発給されています。文書の奥(左側)に異筆で「右分進候者也」と記すとともに、盛親の花押が据えられています。

写真12も金地十兵衛に対して与えられた坪付で、慶長4年(1599)3月22日付けで発給されています。こちらは、日下(日付の下)に久万次郎兵衛などの長宗我部家臣の名前が連署されており、さらに、文書の袖(右側)には花押が据えられています。前掲した元親の花押(写真4)と少し様相が異なりますが、元親の花押の可能性が高いでしょう。

長宗我部氏にまつわる一次史料が今後も発見されることで、元親たちの知られざる一面を知ることにつながっていくでしょう。

「驚異と怪異」を求めて

梅野 光興

令和元年の秋、大阪の国立民族学博物館で特別展「驚異と怪異」を見学しました。サブタイトルに「想像界の生きものたち」とあるように、不思議な「生きものたち」を集めた特別展でした。会場には人魚、龍、怪鳥、天馬、巨人、虫などのテーマで世界と日本の数多くの怪物、精霊、神の造形物がぎっしり集められており、圧巻でした。

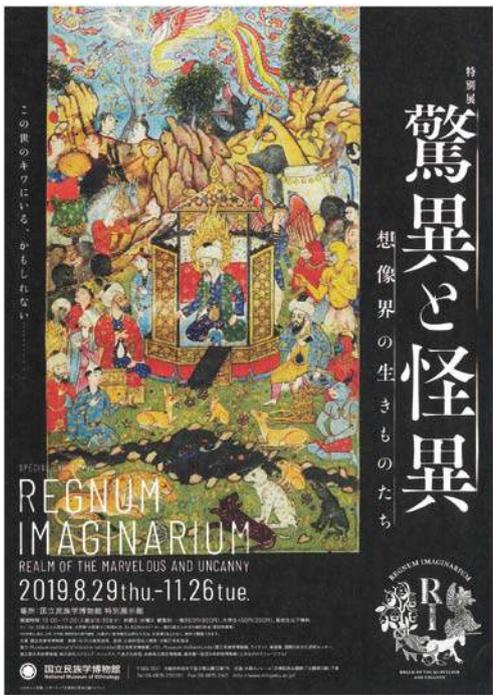
河童や天狗などは「妖怪展」でもおなじみですが、「妖怪展」とひと味違うのは、「生きものたち」と表題にあるように、幽霊は登場しないこと、そして空想上の存在であっても現実存在すると考えられていた（ことがある）

半頃（1時頃）、幡多郡鍋島村（四万十市鍋島）庄屋の兼松多助が四万十川大島六町島ノエゴという所でぼら網で怪物を捕まえました。その怪物は、背が2尺5寸ばかり（75cm）で、手足には

というリアリティを重視したセレクトになっていることでしょう。例えば、今では「河童は本当にいない」と主張したら笑われるのがオチですが、江戸時代の『和漢三才図会』には、サルと並んで川太郎や水虎が出ています。各地で実際に河童を捕まえたという話もあり、江戸時代の高知県にもそんな話が残されています。

文政3年（1820）9月12日9ツ半頃（1時頃）、幡多郡鍋島村（四万十市鍋島）庄屋の兼松多助が四万十川大島六町島ノエゴという所でぼら網で怪物を捕まえました。その怪物は、背が2尺5寸ばかり（75cm）で、手足には

黒く粗い毛が生え、手でなればウナギのような心地でとるととろとすべる。顔は猿に似て色白、顔には毛が無い。なまぐさいことは言うまでも無いなどくわしく書



令和元年の国立民族学博物館特別展「驚異と怪異」のチラシ
画像提供：国立民族学博物館

黒く粗い毛が生え、手でなればウナギのような心地でとるととろとすべる。顔は猿に似て色白、顔には毛が無い。なまぐさいことは言うまでも無いなどくわしく書

かれています（『三安漫筆』）。頭に少しはげがあるのはどうやら河童であることを暗示しているようですが、記録には「怪物」とだけあって、「河童」とは書かれていません。馬を水中に引き込もうとして、逆に引きずられ、泣いて命乞いをしたという民話の中の河童とはリアリティが違います。このように「いるかいかわからない」生きものたちが、かつては存在したと考えられていました。江戸時代ならそんなこともあったかも知れない、と考えるあなたには昭和時代に評判になったヒバゴンを紹介しましょう。昭和45年（1970）7月20日、広島県庄原市西城町の比婆山山中で、身長約160cm、逆三角形の頭でゴリラに似た「類人猿」が目撃されました。それ以降目撃情報が相次ぎ、探検隊やマスコミの取材も殺到し、ふだんは静かな山里は大騒動になりました。怪物は「ヒバゴン」と命名され、その後も目撃事例は続きましたが、確かな証拠もつかめず、騒動は5年ほどして落ち着いたようです。先日、ヒバゴンが目撃されたという村を訪ねました。既に目撃した本人は亡くなられていましたが、近所の人に話を聞くことができました。ちょうど妻と子供が大阪の万博を見

に行っていた時、一人留守番をしていた男性が家の横のイチジクの木の横に立っているのを見たそうです。山深い所で遭遇したのかと思っていた私は、そんなに人家の近くに現れたんだと意外でした。その頃、比婆山では県民の森というレジャー施設を建設中で、現場に通っていた人が途中でヒバゴンを目撃したという話も聞きました。「嘘を言うような人ではない」目撃した人をよく知っているという男性は私にそうつぶやきました。情報が満ちあふれ、世界の全てがわかっているかと思いきや、世界が対する想像力が求められているような気がします。国立民族学博物館の特別展「驚異と怪異」の一部を、来春当館でも展示できないかと、準備を進めているところです。



ドライブインに立つヒバゴンの像とかわいいキャラ化したヒバゴンの看板（広島県庄原市）

開館30周年記念特別講演会

「長宗我部氏から見た戦国社会」を終えて

藤女子大学 准教授 平井 上総

講演では、「長宗我部氏から見た戦国時代」と題して、長宗我部氏にとつての戦国時代の始まりと終わりがいつなのか、長宗我部氏にまつわる出来事は戦国時代の中でどのように位置づけられるか、さらに本能寺の変と長宗我部氏の関係についてお話ししました。

戦国時代の始まりについては、一般には応仁の乱が挙げられることが多く、長宗我部氏も応仁の乱の影響を確かに受けていますが、長宗我部氏の戦国時代は岡豊城が落城して長宗我部氏がいったん滅びることになる1509年あるいは1521年頃を開始時期とみておいたほうがよさそうです。

長宗我部元親の土佐国統一の最大のライバルになった一条兼定については、貴族の最上位の家柄が地域に根付いて大名化していくという戦国時代ならではの出来事から繋がっており、キリスト教伝来といった出来事も両者の戦いに影響していたことを紹介しました。

織田信長を明智光秀が殺害した本能寺の変に関しては、元親が直接関与していたわけではありませんが、織田政権と長宗我部氏の関係悪化を明智光

秀・斎藤利三が心配し、関係改善のために奔走していたことなどから、光秀の決断を後押しする一因として長宗我部氏の存在があったものとみました。戦国時代の終わりについては、長宗我部元親が羽柴（豊臣）秀吉に敗北し降伏する1585年7月とみましたが、実際にはそれ以前に元親が秀吉に全面降伏を申し込んでおり、敗北以前から自立した大名としての地位から降りようとしていたことを指摘しました。



講演会の様子（10月31日当館多目的ホール）

コロナ禍と令和3年度博物館実習

岡本 桂典・西山 浩生

令和元年（2019）に発生した新型コロナウイルス感染症（国際正式名称 COVID-19）の蔓延は、世界的に大きな危機をもたらしています。

この感染拡大の中、当館には令和3年度は、三大学から六名の実習生の申し込みがありました。六名の実習生を極力受け入れられるように、各大学と何度も協議を行いました。

対応の一つとして、実習期間の延期を行うことを検討しました。また、極力少ない人数で実習を行うこととし、実習の期間を3回にわけることになりました。

感染の拡大が続けば、実習の開催も危ぶまれましたが、8月から10月にかけて、実習生を左記の3回に分けて感染対策を行い受け入れることができました。

- ① 8月21日～30日（2名）
- ② 9月1日～8日（3名）
- ③ 10月13日～20日（1名）

（期間中1日休み）

各期間中、会議室で実習を行う時は、常時空気の入替えなどを行いました。また、学芸員と実習生は相互に距離をとり講義や実習を行うなど、感染防止対策を徹底しました。



写真 サマーミュージアム

実習の期間によっては、その期間でしかできないプログラムもあります。例えば、8月には「サマーミュージアムの準備や各プログラムの補助を職員の一員として行いました（写真）。9月には企画展の閉展が重なり、資料撤去に伴う資料や展示具の取り扱ひも行いました。また、10月には来館した小学校の体験プログラムの補助として、教育普及の一環を学芸員とともに子どもたちを指導しました。

コロナ禍での博物館実習は、学生にとっても緊張を強いるものであったと思います。生涯忘れられることができない学生生活の一つとなりました。思います。

土佐のまほろば歩(うおー)く。 いざいざ！まほろば探検！

10月11日(月)。祝日(スポーツの日)と思いきや、平日です。しかも天気予報は雨。どんよりした空の下、出発です。まず岡豊城跡の伝説曲輪あたりから南へ。雨で土が流れ「こつほり穴」が空いちゅう！山の遊歩道を気を付けて下りきった頃、雨がパラパラ降り始めました。今回は「いざいざ！藩政時代の小籠村に行く」。『岡豊村史』に掲載されている小籠村の地図を片手に歩きます。国分川にかかる橋を沈下橋にしなかった訳や、風向きを考えた瓦の葺き方の話などを交えながら東道路を東側へ横断します。水路を見ながら境界を確認したり、蚕を飼っていた大きな家や吉田城跡の遠景を眺めたり、「塚を探しよったら90歳のおばあさんが『そりゃあ、その盛りつこよ』と教えてくれた」など地元ガイドさんならではの話は尽きません。

ですが、残念ながら雨足が強くなり、予定より早めに帰路に。最後に雨の国分川の風情を味わいつつ、「長宗我部氏は抜群の場所に城を構えちよらあよ」と岡豊城跡を見上げました。
(総務事業課)



ガイドは村上隆夫さん

物部で開催中のいざなぎ流展に協力しました

全国的にも有名ないざなぎ流に関する企画展「いざなぎ流御祈禱」が、9月14日から地元・香美市物部町大柵の奥物部美術館で始まりました。神によって形が異なる御幣を多数展示し、いざなぎ流の信仰に迫ります。現役の太夫さんによる山の神の棚や家の神の祭壇は迫力十分。奥深い祈禱の世界を垣間見ることが出来ます。当館も展示に協力しました。令和4年2月27日まで開催。現地で見るといざなぎ流の世界はまた格別です。
(梅野)



コーナー展「おひなさま」を開催！

会期 令和4年2月4日(金)～3月13日(日)

郷土玩具収集家の城田政治氏と山崎茂氏のコレクションから土人形や張り子人形の雛を展示します。恒例の季節展示なので、リピーターの皆さんにもお楽しみいただくため、年ごとにテーマを変えています。

今年のテーマは「雛の模様」です。郷土玩具の雛には、植物や幾何学模様などがみられます。

写真の古賀人形は、男雛の袖に松、女雛には青海波が描かれています。常緑樹の松は不老長寿を象徴する縁起の良い図柄です。青海波は、雅楽「青海波」に由来するとされ、おだやかな波の広がりに、平穏が未来永劫続くようにとの願いがこめられているといえます。

女の子の健やかな成長を願う吉祥文様の雛人形たちを、ぜひご覧ください。
(中村)



古賀人形(長崎県)

千支張り子の絵付シリーズが一巡！

当館は、いの町の草流舎の皆さんを講師にお迎えし、平成22年(2011)の卯年から千支張り子の絵付の「ワクワクワーク」を開催してきました。草流舎は、土佐和紙と土佐漆喰という高知県の伝統的な素材を組み合わせ、土佐和紙漆喰張り子を製作しています。

郷土人形作家から手ほどきを直接受ける絵付は大人気です。なかには毎年ご参加の方も。草流舎のご指導とカルチャーサポーターのご助力によりこれまで続けてこられたワークショップは、本年12月4日の寅で十二支が一巡します。
(中村)



昨年の「福丑の絵付」コロナ対策で屋外展示山村民家の庭にて



参加者の作品

次回

特別展「驚異と怪異」

令和4年4月29日(金)～6月26日(日)

「なぜ人類は、この世のキワにいたるかもしれない、不思議な生きものを思い描き、形にしてきたのか？」令和元年に国立民族学博物館が開催し、話題になった特別展「驚異と怪異」の一部を当館で展示。同館の民族資料を中心に、人魚、龍、怪鳥など世界各地のさまざまな想像上の生きものを紹介します。奇妙で怪しい、不気味だけどかわいい、クリーチャーたちが大集合!



悪魔仮面(メキシコ)
国立民族学博物館蔵 撮影:大道雪代氏

れきみんのお正月

令和4年
1月2日(日)・1月3日(月)



お正月にちなんだ大人から子どもまで楽しめるイベントを開催します。家族みんなで新しい年をスタートしませんか。

学校教育活動支援事業



学校等が教育活動の一環として館での活動を計画し、バス等を借り上げて来館する場合に要するバス等借り上げ経費の定額を負担します(希望校多数の場合は選考)。社会科や総合的な学習の時間等のほか学校行事など、各校の教育課程に応じて体験学習プログラムとともにご利用ください。詳しくは、当館HPをご覧ください。お電話(088-862-2211)等でご連絡ください。

臨時休館のお知らせ

臨時休館: 12月11日(土)～12月16日(木)
館内作業のため休館します。

岡豊風日(おこうふうじつ) 第114号
令和3年(2021)12月1日
編集・発行 (公財)高知県文化財団
高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1-0-99-1
TEL 0888(866)22211
FAX 0888(866)2110
開館時間 午前9時～午後5時
休館日 年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり
観覧料 (通常展)大人(18才以上)470円
(企画展)通常展込520円
団体(20名以上)370円
団体(20名以上)420円
無料・高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(一名)
印刷・川北印刷株式会社

https://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

開館30周年記念企画展

長宗我部氏とその時代

——一次史料がつむぎだす、その実像——

令和4年1月14日(金)～3月21日(月・祝)

近年、長宗我部氏に関する定説が覆される事例が増えています。その背景には、当時作成された古文書、いわゆる一次史料の発掘とそれに依拠した研究の進展があります。

さらに、新たな高知県史編さんの準備が進められており、長宗我部氏が活躍した時代の古文書の収集がより一層急務となるのではないのでしょうか。そこで、本展ではこれまでの展示会とは少し趣を変え、新たな歴史像をつむぎだす材料となる古文書に着目します。そして、長宗我部氏が生きた時代をリアルに描き出します。



企画展関連催し

●連続講座「長宗我部氏研究最前線」

1月23日(日)「考古資料から読み解く長宗我部氏」

講師: 高知大学准教授 宮里 修 氏

2月13日(日)「長宗我部地検帳から読み解く長宗我部氏」

講師: 当館資料調査員 目良 裕昭 氏

2月27日(日)「新出の長宗我部元親書状が語る土佐の造船」

講師: 高知大学教授 津野 倫明 氏

3月20日(日)「長宗我部元親百箇条からみる戦国社会」

講師: 明治大学教授 清水 克行 氏

●ミュージアムトーク(担当者による展示解説)

1月22日(土)・2月19日(土)・3月19日(土) 14:00～14:30

※企画展関連催しは、すべて観覧券要

連続講座は要予約(電話・メール・FAX)、先着各60名

コーナー展

えと 干支の玩具 寅とら



12月17日(金)～令和4年1月30日(日)

郷土玩具収集家・山崎茂氏のコレクションを中心に、干支の「寅」にちなんだ全国の虎玩具を展示します。

出雲張り子(島根県)

コーナー展 開催中～令和4年3月21日(月・祝)

昔のくらしの道具

ハガマや炭火アイロンなど電気を使わないくらしの道具を紹介します。

コーナー展 令和4年2月4日(金)～3月13日(日)

おひなさま